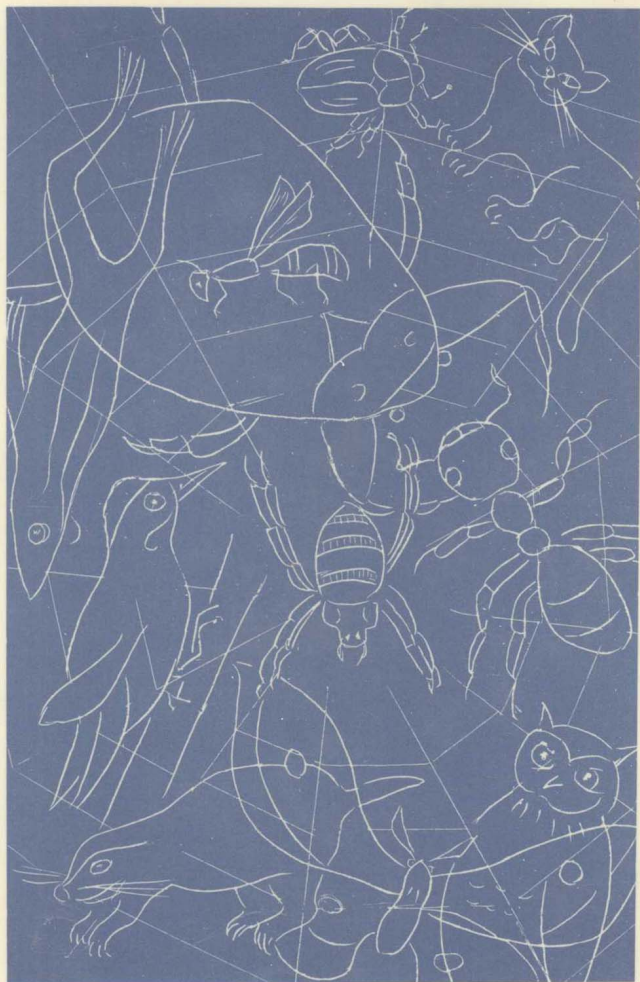


私を呼ぶ自然の仲間

岡野薫子



人文書院

岡野薫子
私を呼ぶ自然の仲間



人文書院

著者紹介

岡野薫子（おかの・かおるこ）

東京農業教育専門学校・附設女子部卒業。

1954年科学映画界に入り、科学映画のシナリオを執筆。

1961年から児童文学を発表。『銀色ラッコのなみだ』

（講談社文庫）、『シカを呼ぶ笛』（偕成社）、『ふたりの

ブリズム』（あかね書房）。エッセイ集『海の記憶』

（童心社）、『アナグマたちの夜』（童心社）など著作多

数。

私を呼ぶ自然の仲間

一九八二年四月二〇日初版第一刷印刷
一九八二年四月二五日初版第一刷発行

著者 岡野薫子

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺高倉西

電話・〇七五―三五―一三三九一
振替・京都〇―一〇三

印刷 河北印刷株式会社

製本 坂井製本所

© Kaoruko OKANO, 1982.

Printed in Japan.

落丁、乱丁本はお取替え致します。

目次

少女時代

科学映画の主役たち

創作の世界のなかで

山の生活

あとがき

239 201 139 81 5

私を呼ぶ自然の仲間

一
少女時代



夏の終りに、信州の黒姫にやってきた。

いつも夏じゅう滞在したあとではいやでも目につく緑の疲れが、今年はそれほど気にならなかった。夏をぬかしてきけると、また、受ける感じは違った。

夏の終りの山は静かだった。まだ熱^{あつ}りの冷めないまま、蜀黍^{もろこし}畑には強い日が反射していた。しかしまた、道端のススキはすべすべした穂をゆらしながら秋の訪れを告げていた。ススキは花の咲く前のこの時期が一番美しく感じられる。長い穂を鞘から抜きかけている様々な表情は見飽きない。筆の穂先のように固まったのは、指先でもむと、はらりとほどけてひろがる。薄紅とも紫ともつかぬその色は、つやつやとして感触は爽やかだ。山道を歩いていると、足もとで身をかわず蛇の気配がする。また、林をぬけて広々した高原の草原をよこぎる時、秋の虫たちは草の中ですだくように鳴いていた。私の足音にふと鳴きやむが、過ぎれば鳴く。リレーをするように次々鳴くの

がおもしろかった。

山莊のほとんどは雨戸をしめきって、人の気配もない。まわりの木立ちから、蟬が、時々思いたしたように鳴きだす。その声は弱々しかった。

しばらくあけてなかった仕事部屋は、湿った木の香りがした。けれども、机に向かうと、途切れた時間はすぐにつながり、まるで昨日からの続きのように感じられた。部屋窓からは、敷地の続きの下の方に、いつもの白樺の小さな林が見わたせた。そして、その合間に、畑で働く人の姿があった。私が窓から身をのりだせば、弾むような挨拶が上と下とで交わされるだろう。

山にいて、いつも思うことは、自然のなかに身をおいた幸せと、そして自分の無力さだ。この土地に生まれ育った人の逞しさには到底かないはしないし、自然への寄り添い方にしても、自分の甘さを知られることがしばしばである。私はひたすら謙虚になるだけである。

山莊の南側のベランダにはぶらんこが吊つてある。湖の別荘にあったのを見て、ふと思いつき、大工さんにつくってもらったものだ。家の外壁に取り付けてあり、ぶらんこというよりは揺り椅子といった感じである。秋の枯葉が舞い落ち、ドングリがばらばら音をたてて降ってくるその頃――、ぶらんこでひとり揺られていると、透明な光の中に自分自身消えてしまいうさだ。ぶらんこはいったりきたり、振子のように揺れる。人がのっていないくても、ぶらんこは風が吹くと揺れはじめる。

このぶらんこ古い時計の振子とを同調させて、時間を逆に戻らせ、過去の時間を再現させること

を、私は或る作品のなかで試みた。『ゆめとふりこ』という作品である。この本のあとがきに、私はこう書いた。

「——信州の山のふもとに、初めて小さな仕事場をもった当時、私は、それまで味わったことのない感慨にとらわれた。それは、自然に囲まれたなかで生活する安らぎの感情と、同時に、その場所へのかなり強い執着心が自分のなかに目ざめたことに対する驚きであった。執着心は、一種の寂しさにもつながる。そうした心の状態からは間もなくぬけだすことができた。そして、その折々に、**“時間の流れ”**を強く意識したことが、この作品を書く動機となったのだった。(後略)」

作品のなかでは、**“山の小屋”**を手放さなくてはならなくなったおばあさんが主人公だった。おばあさんは、子どもの頃の思い出のいっばいつまった**“山の小屋”**を、本当は手放したくない。また、おばあさんとは子どもの頃からの友だちである管理人のおじいさんにしても、その思いは同じだ。

「この家が建ったのは親父の代だね。その頃は、今みたいに、まわりの別荘なんか、まるでなかったね。あの方は、別荘という呼び方がお嫌いでした、ここを**“山の小屋”**と呼んでおいででしたよ」と、管理人はいいながら、ベランダの階段をみしみのぼっていく。そして、この古い小さな別荘を見にきた親子連れのうち、上の男の子が、ベランダに吊ってあった古いぶらんこを通して、おばあさんの過去の世界にはいっていく。おばあさんの少女時代はそのまま、少年の目に見えるように

なり、時間を超えてふたりは友だちになる。自然が好きで、虫やトカゲや蛙など、小さな生きものの世界に心を強く惹かれていた少女——。その少女は私自身だった。

そういえば、いつだったか、「私の作品の原風景」という題で、雑誌に書かされたことがあった。原風景——。漠然としたひろがりを持ちながら、同時に収斂される、面白い語感をもった言葉だ。私は長らく短編映画の世界にいたせいか、この言葉から、白黒映画のフィルムをゆっくりと逆回転させるような、そんな響きを感じてしまう。時の流れをさかのぼり、今在る作品の軌跡を探っていく。懐しさと同時に、原点から逃れることのできない、ある運命的なものを強く感じる。

ふと思いだすのは、昔見た「市民ケーン」という映画のことだ。新聞王といわれた人物の半生期を描いた優れた作品だった。オーソンウェルズ扮するところのあぐの強い主人公は、孤独な死の床で、「薔薇の蕾」という言葉をいいのこす。この言葉が彼にとって一体どんな重要な意味をもっていったか、映画のなかの同次元の人物たちには理解できない。ただ、この映画の観客だけがわかる仕組みになっている。それは、彼が、貧しかった子どもの頃、雪のなかで乗って遊んだ櫓に描かれた薔薇の蕾なのである。口減らしのため、子どもの彼が無理矢理自分の家から連れていかれた時も、雪のなかで、このお気に入りの櫓で遊んでいた。やがて成人し、新聞王となった彼の屋敷の物置に、この櫓は大切にしまわれていたのだった。彼の死後、櫓はがらくたとして暖炉にくべられてしまう。

「こんな古ぼけたもの、どうして今までとっておいたんだろう」

そう呟きながらくべる人は、燃える櫛を顧みもしない。しかし、その炎の中から、描かれた薔薇の蕾が浮かびあがってくる。それを見て、はっと心をつかれるのは、この映画の観客である私たちだ。燃えさかる炎の中の薔薇の蕾は、実に印象的なラスト場面^{レイシ}だった。その蕾は、主人公の幼い日の象徴ともいべきものだった。あるいは挫折の印といってもいいかもしれない。

私自身のことでは、自然をみつめ、生きているもの同士のかかわりあいに興味をもったのは、子どもの頃だった。幼い子どもは普通、誰でも、まわりの生きものに不思議さと親しみ、あるいは恐れを感じる。ただ、私の場合、ひとりっ子で、早くに父を亡くしたことが、より一層、自然に目を向けさせ、私と自然の結びつきを深めることにもなったのだった。父は三十一歳で、私が八歳の夏に病死した。それまで両親にはさまれて、息苦しいような幸せのなかにあったひとりっ子の環境は大きく変化した。ある意味では、この時から、心の自立ができるようになったのだった。そして、この時から、私は家から外に出て、仲間と自由に遊べるようになった。それまでは両親から、「お友だちは家へつれていらいっしょい。女の子なんですから、家の中で静かに遊びなさい」と、そんなふうに躰けられていたのだった。

父の死後、母と私は今までの家をひきはらい、小さな借家に引越していた。歩いて二十分以内の距離だったのは、小学校を転校しないですむようにとの配慮だったのだろう。近くに、友だちの次

子ちゃんの家があった。公園にあるような大きなぶらんこが庭にあって、私はよく遊びにいった。母も、もうその頃は、家の中に私をおとなしくさせておくことがむずかしくなっていた。私はいろいろな友だちと賑やかにいるのが好きだった。

同じ両親から生まれた「きょうだい」という存在が、私にはふしぎで仕方がなかった。それも、同じ子どもができるのではなく、顔かたちも性格もよく似ていながら、どこか、まるで違っているのが、とてもふしぎに思われた。また、それまで仲よく遊んでいた友だちが、いざとなると、きょうだい同士、がっちりとかたまってしまう時には、どうしようもない淋しさを感じたものだ。淋しさのなからふしぎさが頭をもたげ、その気持は諦めに変わっていった。しかし、今考えると、きょうだいになかったことは、ひとりぼっちの時間を、ほかの子たちよりは余計にもてたということだった。また、いつもひとりであるから、大勢という楽しさも倍加されたのだろう。そして同時に、子どもの頃から、ひとりで過す時間の楽しさを、私は知ることができたのだった。家の中でする人形遊びや冒険ごっこも楽しかったけれど、ひとりで庭にでているのも楽しかった。庭には花が咲いていて、蟻たちが忙しそうに歩きまわっていた。

「薫ちゃん、外にいるのなら、帽子をかぶりなさいよ」

母の声が、耳もとに聞える。私が自分のおかっぱ頭に手をやると、燃え上がりそうに熱くなっている。見ると、白い夏の光が射している洋室の窓から、ピケ帽を持った若い母の腕が、こちらに差

しだされている――。

※

八歳の秋から十四歳までを過したその家は、東京の矢口渡駅に程近い場所にあった。古い町名を安方町といい、すぐ近所に安方神社があった。広い境内には木が多く、夏の頃、紙芝居屋がよく、そこで紙芝居をやっていた。男の子が嬉しそうに、紙芝居屋のおじさんから持たされた重い拍子木を打ち鳴らしている。そして、どういうわけか、この場面を思いだす時、紙芝居屋は黒い雨合羽を近くの木の枝にかけているのである。神社の前の広い道を歩いて家までは、子どもの足でも五分足らずの道程だった。左手には大きな家が建ちならび、――ぶらんこのある次子ちゃんの家も、その一郭にあった。――右手には幾筋もの路地が広い道に通じていた。私の家は、三本目あたりの路地を右にまがった中ほどにあった。路地の両側に、小さな平家建ての家が向かいあってならんでいる、そんな静かな一郭だった。当時は、どの家でも、子どもの数は三、四人というのがふつうだったが、その辺りは、小さい家のならびのせいか、子どもは少なかった。子どものいない家では、たいてい、犬か猫を飼っていた。今と違って、どの家にも庭があったし、だれにも気がねなく、動物を飼うことができたのである。

私の住んでいた小さな家も、門から玄関までのあいだのひらけた庭と、まん中の客間に面した中

庭と、そして、勝手口の裏庭と——これだけの庭があった。裏庭は、きれいさっぱりとしたもので、下駄で踏みかためられた地面はつるつるしていた。ここは、洗濯ものの干し場になっていた。中庭は、隣の塀にさえぎられてうす暗い。なんといっても明るく陽光に満ちていたのは、門から玄関に至るあいだの表側の庭だった。表側の庭のうち、道に面した洋間の窓ぎわには、藤棚があった。美しい花房の季節を過ぎて、夏がくると、道のほうまではみだした藤の葉かげに、近所の子どもたちはよく、ままごと遊びのごさをひろげた。

藤棚の下にはギボウシが植えてあり、また、鉢ものが置かれていたりで、どことなく、子どもの私には立ち入りにくい場所だった。しかし、玄関わきの、二十平方メートルたらずの場所は、ユキノシタの自然なしげみにおおわれ、あとはただ、ニワザクラの鉢がひとつ。ふっとかがみこんでみたくなるような親しさがあった。私が、小さななかと出会い、彼らの世界に心を惹かれるようになったのも、ここだった。くびが痛いのも忘れて、ユキノシタの葉かげをじっとのぞきこんだり、重い踏み石をもちあげては、わらわら逃げまどう蟻たちや、また、ハサミムシの親子をみつけたり……。

でも、そんなふうに、小さなものたちの世界に興味をもちはじめたきっかけは、なんだったのだろう。十歳くらいまで、私は別に、虫が好きでも何でもなかった。毛虫を見てこわがりもしなかったかわり、トンボや蝶がとんできても、つかまえる気はあまりおこらなかった。小さなものたちを、